企　画　書

「中西利雄アトリエを後世に残すために」

中西利雄アトリエを保存する会（仮称）

曽我貢誠・勝畑耕一　編

「中西利雄アトリエを後世に残すために」

目　　次

１）中西利雄アトリエを保存する目的
２）中西利雄アトリエを後世に残すことの意義
３）では、どうしたらアトリエの保存を実現できるか？
４）組織編成について

５）アトリエの基本的な活用法
６）クラウドファンディングへの道（資金集め）
７）アトリエの修復工事について
８）アトリエの運営の主体について
９）開館の仕方について（後日各界の意見を参考に決定）
１０）運営の仕方について

１１）これからの日程
１２）これからの主な予定（２０２３～２０２６）
１３）中西家に対する財政的な契約について
１４）当面の課題として
１５）終わりに　---未来を見据えて---

１）中西利雄アトリエを保存する目的

東京都中野区桃園町の地に「中西利雄アトリエ」を文化遺産として保存することは、戦前から戦後にかけて活躍した画家「中西利雄」の芸術的・歴史的な偉大な価値を保存するだけでなく、同時代を生きた画家や彫刻家などの芸術作品を合わせ展示することで、より大きな心の安らぎを体験する場となると考えます。ここ桃園にある歴史的な価値を持つアトリエは、さらなる中野の芸術・文化の発展を目指す指針になると考えます。

２）中西利雄アトリエを後世に残すことの意義

木造の建物は一般の人にとっては、ただのおんぼろ家屋に見えるかもしれません。しかし、この建物は近代日本建築運動のリーダーのひとりであり、モダニズム建築デザインと同時に和風建築の名手であった建築家・山口文象の設計としても立派な文化遺産です。また画家としての中西利雄、彫刻家としての高村光太郎、イサム・ノグチがここで同じ時を過ごしたアトリエとしても大きな文化的価値があると考えます。

中西利雄は昭和の初期、水彩画の世界に新しい息吹を吹き込みました。当時、水彩画の革命者と言われましたが、昭和２３年４８歳の若さで亡くなりました。いわば忘れられた洋画家です。この中西利雄に改めて光を当て、半永久的にこの中野の地から様々な人々に知らせていくことは残された者の使命です。

一方、高村光太郎は、昭和２７年秋から３１年４月まで、このアトリエで三年半過ごしました。戦争に対する贖罪意識から岩手の花巻に引っ込みましたが、十和田湖に立つ「乙女の像」制作のため、このアトリエに住み始めました。この場所が、空間が無ければ資材の調達も含め製作は不可能だったと思います。亡くなるまでの足掛け四年間、このアトリエで気持ちよく過ごせたのは、中西夫人・富江さんや子息利一郎氏（２０２３年１月没）兄弟の温かい心遣いがあったからだと思います。

また世界的な彫刻家となったイサム・ノグチさんもここに住んだことがあり、利一郎氏は、ノグチのパートナーだった山口淑子の弟さんに映画に連れていってもらったことがある、と語っています。

このアトリエを残すことは画家・中西利雄の想い出を残すだけでなく、中野区桃園を訪れることによって同時代を生きた様々な芸術家、中西利雄、高村光太郎、イサム・ノグチへと心の対話を行うことができる空間となるからです。

今日、パンデミックとなった新型コロナウイルスの蔓延が収まらず、一方ロシアのウクライナへの侵略は、戦後７８年を迎えた平和な日本にとっ

て改めて身近に戦争の足音を聞くことになりました。戦前から戦後に生きたこれらの芸術家のアトリエを残すことにより、次の世代を引き継ぐ人たちに未来について考える場所を提供したいと思います。

３）では、どうしたらアトリエの保存を実現できるか？

① １００人賛同者がいるとしても実現するには、計画をたて、きちんとした組織が必要です。そこで仮に「中西利雄アトリエを保存する会」（仮称）とさせていただきます。

② このアトリエは文化遺産と考えます。建物は７０年を超える年月の中で老朽化が進んでいます。このまま残すことは、耐震性・安全性などの確保が難しいと考えます。原型を残しながら、耐震性や新たな用途を考慮し、修復作業を行うそのための設計図を描く必要があります。

③ 修復作業には資金が必要です。またアトリエを今後も維持するためには、その資金を見積る必要があります。それには中西家のご遺族に経済的な負担がかからぬことが重要と考えています。

④ 行政や企業などに頼るだけでなく、どのように当初の資金集めを行うか。具体的に戦略的な計画が必要です。

⑤ このアトリエは中西家のご遺族のものです。中西家にとって経済的な面を含めて、次世代へのメリットが無ければ実現できません。この点を熟慮する必要があります。

⑥ アトリエを残すことが決まったとしても、その後の維持管理を、誰がどう行うかという課題が残ります。そこで、これに関する見解を順に述べます。

４）組織編成について

実行委員長　（近代文学研究に関して著名な方）
副実行委員長（二名程度、花巻や地元のかたを含む）
実行委員　　（五名程度、行政の方を含む）
広報・事務員（数名程度）
特別顧問　　（著名な方）
応援・サポーター（近代詩他、音楽・美術**ファン**の方々）

※ 実行委員長は、近代文学について理解のある人にお願いしたいと思います。このアトリエで亡くなった光太郎さんを偲んで、翌年から４月２日の命日に「連翹忌」を草野心平や高名な文学者・詩人と共に立ち上げ事務を担ったのは、２０２０年９４歳で亡くなられた北川太一さんです。

北川さんは、光太郎の生前、何度もこのアトリエを訪ねて親交を重ねています。光太郎本人から、僕より僕の事を知っている青年、といわれました。中西利雄夫人・富江さんにも色々よくしてもらった、と懐かしく語っておりました。利一郎さんも北川氏をよくご存じで共に光太郎への思いを共有されていました。追悼忌はアトリエの庭先に連翹の花が咲いていたということで「連翹忌」と名付けられ、第一回はこのアトリエで開催されました。２０２３年でもう６７回にもなり（コロナ禍で３回中止）現在も４月２日の命日に開催しています。

※ 日本ペンクラブ、日本詩人クラブ、日本現代詩人会等から応援者を募ります。文学者、詩人たちです。一方、「連翹忌」には、全国から、美術館、文学館の人たちも参加してくれています。その仲間からも発信をしていきたいと思います。また、中西利雄さんや光太郎が卒業された東京芸術大学や、東京国立博物館館、草野心平記念文学館、佐藤春夫記念館の館長さん等にも依頼したいと思います。最終的に、１００人以上の芸術家、画家、彫刻家、文学者、詩人、中野桃園地域をはじめ地域の方々の支援を集め、会員になっていただきたいと思います。

５）アトリエの基本的な活用法

・耐震補強をはじめ建築内外装工事、各設備工事を行い、中西利雄、高村光太郎、イサム・ノグチの作品や資料を鑑賞できるようパネル等でも展示する。将来的には画廊としても機能させたい。
・中野区にゆかりのある芸術家の展示スペースも設ける。
・屋外に喫茶コーナーを作り、見学者に安らぎの場所を提供する。
（完成後はとりあえず談話コーナー）

６）クラウドファンディングへの道（資金集め）

・アトリエの修復費用だけでなく、中西家にも固定資産税などの負担がかからぬよう、経済的な支援が出来るような形にする。
・文化庁、東京都、美術系・建築系大学、企業などと交渉する。
・日本建築家協会中野支部、東京都建築士事務所協会中野支部などへも賛同の声がけを行う。
・協賛金の主な依頼先は次の団体を予定している。

◎日本ペンクラブ、日本詩人クラブ、日本現代詩人会など
◎全国の博物館、美術館、文学館、図書館など
◎全国の新聞社、放送局、出版社などの広報

◎ホームページやクラウドファンデングで資金を募る。

７）アトリエの修復工事について

耐震補強工事、建築内外装工事、給排水衛生設備工事、空調設備工事、電気設備工事、家具工事（資料収納、展示等）、調査・設計・監修費等

工事予定概算金額＝１５００万円～２０００万円

（工事計画により変動）

８）アトリエの運営の主体について

第１案　美術系大学と交渉し入館・入室業務を委託する。その他の美術・建築に造詣が深い大学などとも交渉する。（文京区の樋口一葉が通った質屋は取り壊し一歩手前で同区内の跡見学園　が引き取り、学生を派遣し、土日のみ開館している。）

第２案　中野区を母体に運営委員会を設置し、運営する。中野区民にも呼び掛ける。

９）開館の仕方について（後日中野区他、各界の意見を参考に決定）

第１案　金・土・日・祭日のみ開館する。

第２案　一年を通してではなく、例として半年間二期とする。

前期　４月から６月　（光太郎の命日を含む）

後期　９月から１１月（中西利雄・高村智恵子の命日を含む）

第３案　休館日を設けて年間を通して開館する。（区内の芸術家や小中高の作品展を含む。室内楽なら２０名程度の席を設営できる）

１０）運営の仕方について

・常設として　中西利雄、高村光太郎、イサム・ノグチの作品を展示する。

・展示の募集として　スペースは広くはないが、中野区民を中心に個展会場として活用する。積極的に広報し、未来の芸術家に活動の場を与える。

・その後には　運営が軌道に乗れば、簡単な喫茶コーナー・売店を設ける。コーヒーを飲みながら、芸術を語る所にする。

１１）これからの日程

２０２３年１月、ご長男の中西利一郎氏が亡くなられました。今年から資金集めを準備して、早ければ４年後くらいでの完成を目指したい。

１２）これからの主な予定（２０２３～２０２６）

２０２３年８月	◇会の組織作り ・「中西利雄、高村光太郎のアトリエを保存する会」（仮称）として、組織を作る。勝畑耕一、曽我貢誠も入る。他に四、五人の方に依頼する。また特別顧問を選任する。 ・アトリエの修復の設計図を確認する。建築家を選任する。
８月	◇文化的価値の高い建物なので地元の中野区を筆頭に考え提案書を作成する。本来ならば中野区民を対象に協力者を募りたいところだが、まだ保存する会にはその力がない。したがって、文学者、絵画や彫刻などの芸術家、また全国の美術館、博物館、芸術系大学などに呼びかけ賛同者・協力者を募る。 ・協力者を署名活動で呼びかける。この活動は文化的な趣旨の理解のためなので、署名のみにして協賛金などは求めない。
９月	◇９月ごろから署名活動を始める。翌年一月まで１００人以上の協力者を集める。 ・日本ペンクラブ　日本詩人クラブ、現代詩人会　日本文藝家教会　日本詩歌句協会　など ・全国の博物館、美術館長宛に協力者の依頼状を送る。 ・全国の美術系・建築系大学長に主意書を送る
９月	◇勝畑耕一編の小冊子『ふるさと文学散歩シリーズ---中野区桃園と光太郎---』（中西利雄と水彩画/光太郎と中野のアトリエ）（３２頁）を配布する。
２０２４年１月	◇中野区議会に「アトリエ保存」の提案書を出す。文書の最後に保存する会（仮称）だけでなく、約１００人の協力者の名簿も添えて提出する。区長のほか中野区議会・各会派にも陳情・依頼する。
３月	◇中野区議会で動きがない場合は、文化庁か東京都の文化財保存関係の団体に働きかける。
４月	◇日本ペンクラブ、日本詩人クラブ、日本現代詩人会等の総会で「アトリエ保存」の決議を依頼する。「議題としては出来ない」と断られた場合は、それぞれの

	団体の公報誌で全国の会員に情報を伝えることはできないか依頼する。
５月	◇「アトリエを保存する会」のホームページを立ち上げる。提案書の内容を具体的に記載する。また、写真なども多用し、有識者に原稿をお願いし、保存する意味について述べていただく。 ◇ホームページ上に告知し募金を行う。 ◇クラウドファンディング（キャンプファイアー）開始。 目標額は２０００万円として全国の諸団体そして芸術に関心のある個人に呼び掛ける。
７月	◇大手出版社に協賛金の依頼をする。（講談社、集英社、岩波書店、新潮社、角川書店、秋田書店など）
８月	◇様々な報道機関（各新聞社、NHK、J.com、中野区広聴・広報課など）にアトリエ保存の広報活動を始める
２０２５年４月	◇アトリエ修復工事開始
９月	◇この頃までにアトリエの運営母体を決定する。
２０２６年３月	◇アトリエ修復工事完成
４月	◇連翹忌にてアトリエ修復完了の報告を行う
４月	◇中西利雄アトリエの開館式を行う

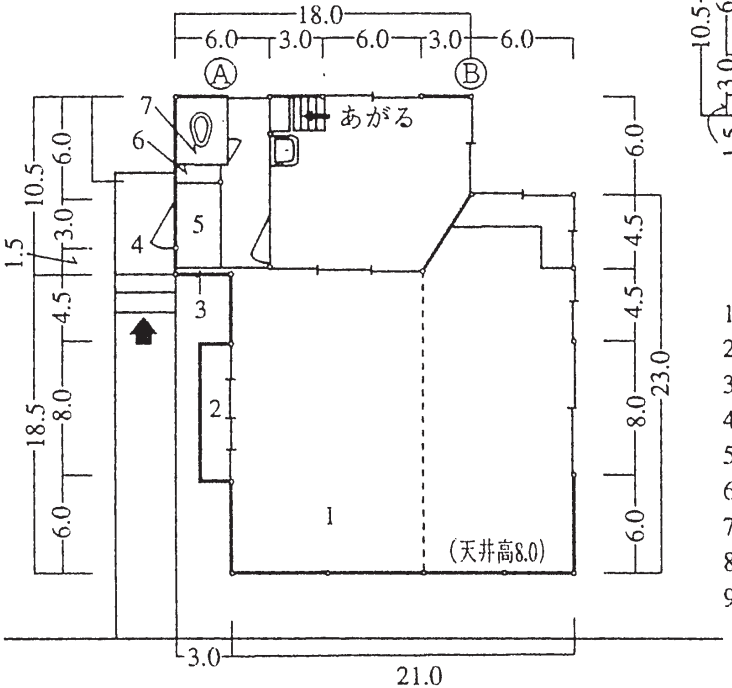
１３）中西家に対する財政的な契約について

第１案　このアトリエは敷地だけでも相当の価値がある。一つの有効な方法として、行政機関や企業、大学などに、建物、土地を含め一括買い上げてもらう。相当の資産価値が予想され文化施設として活用する場合には文化庁、東京都も考慮に入れる。これらの行政機関が無理な場合企業や大学に声掛けして新たな可能性を探る。

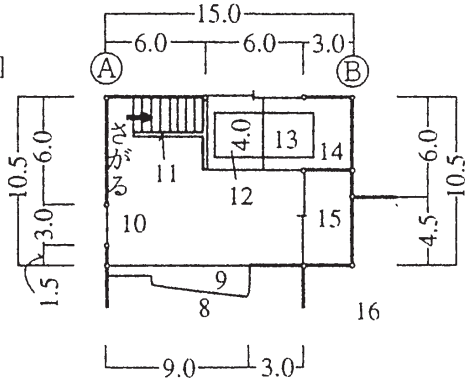
第２案　土地、建物について中西家が所有権を持つ場合について。毎年ある一定額を支払う。また入館料の半額を中西家のものとする。この件については、中西家ご遺族の希望を優先的に考えたい。

中野アトリエの見取図

一階平面図



中二階平面図



1 アトリエ
2 下　戸だな
3 とぶくろ
4 ポーチ
5 げんかん
6 下　はきもの入れ
7 べんじょ
8 アトリエ上部
9 フラワーベッド
10 かいてんまど
11 てすり
12 ベッド
13 たたみ
14 板の間
15 もの入れ
16 トラスト
ガーダー

１４）当面の課題として

・改築工事に何処くらいの予算が必要か。
・中西利一郎さん亡き後、ご令室からアトリエ保存の了解が得られるか。
・保存ができたとして、その管理をどういう形で、誰が行うか。

１５）終わりに---未来を見据えて---

見た目は古くなった木造アトリエですが、観る人によっては文化的にダイヤモンドや高額のお金以上に価値のあるものである。壊してしまったら後には何も残らない。ただの更地になるだけである。マンションを建てると目先の経済的な問題は解決できると思う。ただし、この建物を保存した場合、三十年、五十年と年月が経っていくにつれて、このアトリエは見直され、文化価値も上昇するものと確信する。

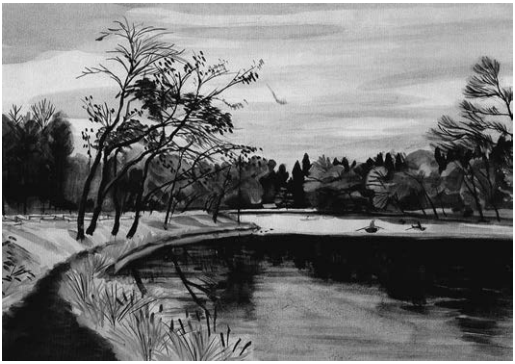
この企画書には細部で至らない部分は多い。しかし、もっとも大切なことは、中西家としてどうしたいかである。中西家の希望には最大限応えていきたい。様々な条件を伺い、それによって方向性も変わってくるはずである。
「保存運動」を成功させたいが、もしも様々な問題を克服できず、アトリエ保存が困難で、応援者のご期待に応えられないと判断した場合は潔くこの企画書の「中西利雄アトリエを保存する会」（仮称）の活動は中止し、会を解散することを約束する。

２０２３．０４．０２

表紙　中西利雄「森のカフェ」
（昭和６年）
９頁　見取り図は筑摩書房版
「光太郎全集」より
１１頁　年譜は中西利一郎氏作成
１２頁　中西利雄「井之頭公園」
（昭和２２年）

中西利雄　NAKANISHI TOSHIO

1900年　12月19日　東京市京橋区霊岸島に生まれる。
1907　越前堀尋常小学校（日本橋）に入学。
1916　私立日本中学校（新宿）に入学、図画教師の真野紀太郎（日本水彩画会）の指導を受ける。
1922　東京美術学校西洋画科に入学、同期生に猪熊弦一郎、牛島憲之、岡田謙三、萩須高徳、小磯良平、山口長男らがいた。
　東京三脚会を小山良修、富田通雄らと結成、'24年蒼原会と改名。
1923　関東大震災で自宅焼失、中野区桃園町に転居。
1924　日本水彩画会会員に推挙される。
1925　第12回光風会展で光風賞を受賞、'28年会友、'33年会員となる。
1927　東京美術学校西洋画科卒業、研究科に１年在籍。同校同期生で上杜会を結成。
1928　５月渡仏、'29年、'30年サロン・ドートンヌに入選、'31年11月帰国。
1932　第19回日本水彩画会展、第５回上杜会展に滞欧作を特別陳列。
1934　第15回帝展で特選受賞。
1935　帝展改組に伴う第二部会展で特選と文化賞受賞、会員に推挙される。
1936　猪熊弦一郎、内田巌、小磯良平、佐藤敬、三田康、伊勢正義、脇田和らと新制作派協会を結成。
1943　『水絵　技法と随想』を総合美術研究所より刊行。
1945　神奈川県津久井郡沢井村中里に疎開。
1947　疎開先より帰宅、文化学院で美術指導をする。
1948　中野区桃園町の自宅で肝臓癌のため死去、享年47歳10ヵ月。
1949　第13回新制作展に遺作22点を特別陳列。
1953　「中西利雄遺作展」（東京、下関、北九州、福岡、佐世保、大阪、津、名古屋、酒田へ巡回）開催。
　遺作集『中西利雄』を刊行。
1955　『水絵　技法と随想』を『水絵の技法』と改題改訂後美術出版より刊行。
1957　「中西利雄大作展」（福岡・岩田屋）開催。
　「中西利雄遺作展」（佐世保・虎屋百貨店）開催。
　「中西利雄水彩画展」（広島・福屋）開催。
1964　「近代作家の回顧　富田渓仙／太田聴雨／佐藤玄々／石井柏亭／中西利雄」（国立近代美術館）に出品。
1967　「近代日本の水彩と素描展」（東京国立近代美術館）に出品。
1978　「水彩画の巨匠　中西利雄展」（広島県立美術館、香川県文化会館、岡山県総合文化センター、徳島県郷土文化会館へ巡回）開催。
1979　「中西利雄展」（東京・小田急百貨店）開催。
　「中西利雄展」（大阪・梅田近代美術館）開催。
1982　「新しい水絵を求めて　中西利雄展」（千葉県立美術館）開催。
1984　「中西利雄展　新しい水絵を求めて」（呉市立美術館、愛媛県立美術館、姫路市立美術館へ巡回）開催。
1985　「パリを描いた日本人画家展」（パリ・カルナヴァレ美術館、'86年神奈川県立近代美術館、三重県立美術館へ巡回）に出品。
1987　「水と光の出会い　近代日本水彩画の展開」（福島県立美術館）に出品。
　「水彩画に見る信州風景画展」（長野県信濃美術館）に出品。
1988　「瀬戸内風景　近代画家の眼」（岡山県立美術館）に出品。
　「水彩画の巨匠　中西利雄展」（浜松市美術館、'89年伊丹市立美術館へ巡回）開催。
1989　「小堀進と昭和の水彩画家」（茨城県近代美術館）に出品。
1990　「絵画による同窓会展」（稲沢市萩須記念美術館、秋田市立千秋美術館へ巡回）に出品。
1991　「みずゑのあけぼの　三宅克巳を中心として」（徳島県立近代美術館）に出品。
1993　「藤島武二と９人の若き洋画家たち」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）に出品。
1995　「大正･昭和の水彩画　蒼原会の画家を中心に」（渋谷区立松濤美術館）に出品。
1997　「没後50年　水彩画の革新者　中西利雄展」（茨城県近代美術館、'98年小田急美術館へ巡回）開催。
1998　「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」（徳島県立近代美術館、'99年横浜･（そごう美術館）、奈良そごう美術館へ巡回）に出品。
　「没後50年　中西利雄展　水彩画の魅力」（静岡アートギャラリー）開催。
2001　「中西利雄　デッサン・線の表情」（静岡アートギャラリー）開催。



構成・企画・編集

曽我貢誠（詩人・日本詩人クラブ
日本現代詩人会　日本ペンクラブ）
sogakousei@mva.biglobe.ne.jp
〒113-0031　文京区根津 2-37-4-801

勝畑耕一（文治堂書店　代表）
bunchi@pop06.odn.ne.jp
〒167-0021 杉並区井草 2-24-15

印刷・製本　株式会社いなもと印刷